

フランス・キュルテュール 「精神分析のはなし」 第12話

精神分析は世界中で効果を持ったのですが、分析の回数、数千とか、患者数、出版数等々の数値的な指標で計算できるものより、はるかに遠くまで波及しています。たとえば、Ratzinger 枢機卿、のちの教皇ブノア16世は、相対主義の専制について語っていました。私は有罪とされる精神分析の弁護をしなければならないと思っていました。

ある人が分析家の寝椅子に横たわるとき、あらゆる価値が宙づりにされます。たとえその患者が信者であるとしても、そしてそうです、分析家もまた信者であるかもしれません、そうだととも、分析それ自体は、絶対的なものや聖なるものを溶解する効果をもつものです。神の名前、それはひとつの語です。あなたにとってその語に意味を与えているものがなんであるのかを知ることが肝心なことであり、またあなたが躊躇そうになっているものがなんなのかを知ることが肝心です。享楽の経験こそが、語に一あなたにとり重要な語に—その意味を与えているのですが、それのことについて知ることが重要で、そこから不可避的に、神聖化を解く効果が生じるのです。

そのとき問い合わせが提出されます。相対主義のこの専制の背後に、実際、あらたな絶対性が存在していないのかどうか。精神分析がそうと知らずに、そう望まないままに、あらたな絶対性を設置したのではないかというものです。それは享楽の絶対性です。

もっとも、ある時代、合言葉が作られました。享楽からひとつのスローガンが作られたのです。「妨げられずに享楽しよう」と。とはいえるとは逆に、分析においては、ひとは享楽への障害物を発見します。それがあり得れば得るほど、享楽への障害物は外的な法律のせいではありません。享楽への障害物は、享楽自体の条件に内在するものです。

精神分析は良識を変更させました。それは本当でしょう。カトリック教会が無知ではなかった方向性、「<すべてを言う>ことは良いことである」という方向性へ、精神分析は常識を変更しました。いずれにせよ、そんなふうに社会は精神分析を解釈したのです。

以前は、いかなる口実をもってしても言うべきではない物事が、存在していました。つまり聖性の概念をひとが持っていたときにはそうだったのです。聖性とは、「言うこと」によって侮辱されかねないということも含んでいました。それこそまさに、「言うこと」にたいしてそのあらゆる価値を与えてもいたのです。

もしあなたが、そうですね、畜生、とか、ちえつ *crénom de bon dieu, de bonsoir*などと言うときには、口をすすぎに行かなければなりませんでした。そしてもしあなたの言ったことがひとに聞かれていなければ幸いでしたが、そうでなければこの「言うこと」にたいする罪をあがなわなければなりませんでした。

検閲の審級は年とともに大変重要な位置をもつものです。フロイト自身、その重要性を認めていました。彼は精神分析理論のなかで検閲の概念に場を与え、作家たち、思想家たちはつねにそれとかかわりがある、としています。当時本当にそのように言うことが重要でした。作家や思想家の本質的なパートナーは、検閲であるとさえ言え言うことができます。ひとがあなたの話を乱暴に遮らないようにするには、どうしたらよいのでしょうか？

ある本がそれについて展開しています。博識者で有名なレオ・シュトラウスの『迫害と書く技術』と呼ばれる本です。彼はこう考えています。思想家や作家というものはつねに検閲とかかわりをもつこと、そして彼らはつねに行間で表現することを学ばなければならなかつた、と。したがって偉大なテキストは暗号化されたメッセージのように読まなければならぬ、と、その例を挙げなければいけないと考えています。

たとえばソクラテスです。ソクラテスはまさにそのことを、街の語をつかってやすやすとやった人物です。彼は絶対的な価値について説明を強いることで、その同時代人を彼ら自身と矛盾した状況においたのでした。ソクラテスは一種、精神分析の先駆者でした。そしてよく知られているように、彼にとってそれは非常に悪い形でおわりました。

その後、かなり後になって、改革があり、それは確かに沢山の検閲者を誕生させたのですが、しかし全体的には、改革は個人的意識の権利の寛容という方向で進んだのです。さらに後になると、アメリカ合衆国が存在し、迫害された者たちによって設立された諸国家が存在しました。非寛容にたいして、それらの国はある種の憲法上の慎重さをみせました。それは前代未聞の社会の萌芽でした。ひとは相変わらず抑圧、検閲の社会を経験しましたが、アメリカ憲法においては許可の社会の萌芽が見られます。

全体的には「すべてを言う」が、発達した社会においては勝利をおさめ、インターネットが今日あり、ひとは「すべてを言う」方向へとがむしゃらに進んでいると、かなり言えるでしょう。

フロイトは、直前にやってきました。社会、発達した社会がまだヴィクトリア朝をモデルとして生きていた時代です。その中枢に「言うこと」への抑圧が残っていた時代です。それはフロイトにインスピレーションを与えました。検閲、抑圧、抑圧されたものの回帰、概念のそれらすべて一式を、フロイトはその時代の社会において存在していたものから借りたのです。

そして精神分析が世界に現れると、それはパロール、書くこと、シニフィアンの解放へと導きました。それがダダの運動であり、シュールレアリズムであり、ジェームス・ジョイスでした。アメリカ合衆国で精神分析が受け入れられ、導入されたのです。そして20世紀になると深いところで変化がありました。それは聖性の現存が弱体化したことと結びついていました。その結果、「すべてを言う」のは善行であるという概念が、人々の常識として受け入れられたのです。

教会はその概念をもちろんもっていました。13世紀には、年に一度の告解は義務となり、

たとえばジャン・ドリュモー『告白と赦し』と呼ばれる著作を読んでみれば、分析的実践のこだまのいくつかをあなたは見つけられるでしょう。例えば聖フランシスコ・サレジオが贖罪者を極限の愛で迎えるようにと勧めるとき、ひとが彼らを告解で聞くとき、聖フランシスコ・サレジオは「彼らの野卑、無知、愚かさ、遅れ、その他不完全さを耐え忍ばなければならぬ」と述べています。

私たちのアメリカ人同僚たちがしばしばそうしているような、分析的な学問の記述を信じ読み解しなければなりません。ミッシェル・フーコーは「精神分析は告解の続きだ」と言って面白がっていたものです。

ただ、精神分析が養うこの違いというものはやはり存在していると、言わないとなりません。それは罪悪感です。罪悪感は自分を分析するための条件そのものです。他者のことを嘆くためにだけやってくる主体は、そうですね、それは自分の過ちであるとしまいに学びます。そもそも自分の過ちであると認められないならば、正直言って分析することはできません。

ですから絶対に「それは自分の過ちだ」とならない主体というものが存在します。そういったことは起こるのです。ラカンが「げすな奴ら」と呼んだものすらあります。彼はげすな奴らと言い、彼らを分析的実践から遠ざけたほうがよいと言いました。

しかし以下のことも認めなければなりません。それは話し、聞かれる、という、ただそれだけのことが、自動的に赦免の効果をもつということです。つまり必要なのは罪悪感ですが、つぎに実際ひとはほっとするわけです。話し、聞かれる、というただそれだけのことが、承認の欲望を満たすからで、それは人類の基本的欲望であると、言うことさえできたのです。

さらに言えば、今日社会のユートピアを入念に作ろうとする学者たちがいます。すべての人の承認の欲望を満たすことが可能である社会のことです。つまり、ひとはあなたにすべてを与えないが、ひとはあなたのことを聞くことができる、「それは言われることができる」とか、「もし言われるならばそれは善をなす」という考えから出ています。たとえば復権要求というものは、言われなければならずたやすく言われるようにしなければなりません。たとえば今日会社のなかで、人々、パロールの操作者がいて、「ひとはすべての人のことをよく聞くべきだ」と助言しています。なぜなら聞くということだけでも、要求を鎮めるものだから、と。たしかに、すべての人民が国会を求めたのです。

では国会とはなんでしょうか？それはひとが話す場のことです。その時代、世界中ですばらしい飛躍を遂げた民主主義は、一あるひとつの意味があります一、民主主義とは、社会的な心理療法の一形態なのです。民主主義において、各自は一家言もちます。たとえそれが投票、ウイカノンに還元されるとても、そうです、その後、すべては言われて、結果一自称

「結果」と言われるもののことです、もちろん一についてひとはもう嘆くことはできません。

民主主義は私たちの時代の常識を担っています。心理療法や、表現の自由もそうです。それは「すべてを言う」のコンプレックス（複合体）です。たくさん言うこと、私があなたを急き立てるように大急ぎで言うこと、とことん言うこと、です。ですからこう問うことができます。「本当にひとはすべてを言うことができるのだろうか？」、と。

ときおり、ここまでしか行ってはいけませんと指示する法律が存在します。しかしそれらの法律は存在するのですがつねにそのとき、「すべてを言う」へ向かう基本的な社会運動にひとは反対していると考えられるのです。

そしてひとは時折「言うこと」が禁じられるとき、事態が一層悪くなっているという感覚をもちます。それは私たちの社会を押し流すロジックをともなう、ひとつの侵害のようなものです。そして、もしある望みなら、フロイトの勝利と言えるのです。パラドックスでもあって、それは同時に敗北でもあるのです。なぜなら社会に「すべてを言う」という新参者がやってきた結果、言語の領野が衰弱させられたからです。精神分析における「すべてを言う」は、あなたの最も個別的な享楽している意味 *votre sens jouit* を探すために、常識と距離を置くことがあります。でもその一方で、社会的な「すべてを言う」は、ある共通の意味、普通の使い方を強固にして終わるのです。そこから、精神分析自体が誕生させた「すべてを言う」によって、精神分析がむしばまれている状況が生まれているのです。

しかしながら、ひとが「すべてを言」おう、それでうまくいくと信じるとしても、精神分析において接近するのはまさに「それ」に対して、あります。けっしてうまくいかないものが、存在しているのです。

人類のセクシャリティにおいては、なにかが決してうまくいきません。その点にこそ、精神分析にたいしてひとがもつ希望というものが打ち立てられているのではないでしょうか？それはうまくいきません。当然のことながら、後には、ひとはうまくいかないものと、うまくいかなければならないのです。